

Vol.
22

Shumei International

N EWSLETTER



Shumei International is dedicated to improving the human community by restoring the environment, fostering a deep appreciation of beauty and the arts and cultivating leadership among the next generation.

The organization was founded on the philosophy of Mokichi Okada, who taught that cultivating respect for nature and appreciation of the inherent beauty in the natural world will uplift human society and enable a truly balanced and sustainable world.

Shumei International has established programs around the world with a focus on Natural Agriculture.

Shumei International

NEWSLETTER

Vol.22



【表紙】

イギリス イェイツベリー園場にて
二重の虹



秀明インターナショナルは、1.国際協力 2.環境問題への取り組み 3.優れた芸術による人心の向上の3点を基本的なプログラムとして実践します。この実践により、個々の人間性、精神性の向上を促し、社会へ新しい人生観、価値観を提唱したいと考えています。そして、私たち同様の目的を持つ世界中の人たち、団体と協力し合い、世界平和に貢献していくことを目指しています。

Special Topics

3 2024 ORFC (オックスフォード・リアル・ファーマーリング・カンファレンス)

～人と地球の健康のために自然界のスピリチュアルな側面に触れる～

4 レポート 秀明インターナショナル 国連担当理事 アリス・カニングハム

5 ORFC セッション

11 ORFC Q&A

14 ザンビアプロジェクト2023年度 活動報告

19 ザンビア研修に参加した青年の感想

20 マダガスカルで秀明自然農法による子どもたちの支援

Shumei マダガスカル担当 更谷 浩幸



ORFC メイン会場

2024 ORFC (オックスフォード・リアル・ファーマーリング・カンファレンス)

～人と地球の健康のために自然界のスピリチュアルな側面に触れる～

総合司会: ベン・ラスキン
(英国土壌協会 アグロフォレストリー部長)

コーディネーター: アリス・カニングハム
(秀明インターナショナル 国連担当理事)

■講演者

サティシュ・クマール
(思想家/Resurgence編集長)

今橋伸也
(イェイツベリー 圃場 秀明自然農法実施者)

バーバラ・ハチプカ・バンダ
(ザンビア自然農法開発計画代表)

シャーロット・デュフォー
(コンシャス・フード・システムズ・アライアンス
活動アドバイザー)



ORFCレポート

アリス・カニングハム



アリス・カニングハム

秀明インターナショナル
国連担当理事

秀明インターナショナルは、1月4日、5日にイギリス、オックスフォードで行われましたORFC（オックスフォード・リアル・ファーマー・カンファレンス）に参加しました。今年は15回目の会議ということで15年間の振り返りもありました。オックスフォード・リアル・ファーマー・カンファレンスを直訳すれば、オックスフォード本物の農業会議となりますが、正確には本来あるべき農業と訳されるべきではないかと思います。15年前、産業型農業の会議が主流だったイギリスで、環境に優しい、自然に順応した農業を行っている方たちの理念にそった会議の必要性が求められたことがきっかけで始まったこの会議は最初80人ほどの参加者でスタートしましたが、今では本当に大きな規模になったことがうかがえます。私たちが初めて会議に参加したのは2019年で、ORFCが10年目の時でした。その時は1000人ほどの参加者がいて会場も3カ所でしたが、今回の参加者は1800人を超え、オンラインでも1500人ほどが参加しました。当日来場する参加者のために用意された1800枚のチケットは販売後すぐに完売したそうです。セッションの数も今までで最も多い150にのぼり、8カ所の会場に分かれて行われました。

Shumeiとして今まで、ザンビアプロジェクトや、イエイツベリー園場の紹介、日本での秀明自然農法活動について、また清浄な土壌の大切さや、自家採種についてなどのセッションを行ってきました。今年は、ぜひもう少し秀明自然農法の理念の部分、その根幹の部分であるスピリチュアルな側面について話し合いたいと思い、セッションを提案しました。主催者からも賛同を得ることができ、私たちのセッションは、「人と地球の健康のために自然界のスピリチュアルな側面に触れる」と題して、農業におけるスピリチュアリティを認識することや見えない力を信じることによって実施者の意識の変革を促し、生態系そのものに肯定的な影響を与えることについて討議する内容としました。

今回のセッションには、生態学とスピリチュアルな内容の冊子、Resurgence（リサージェンス）の編集長のサティシユ・クマールさんをメインスピーカーとしてお迎えし、Shumeiのパートナーである、UNDP（国連開発プログラム）が設立したコンシャス・フード・システムズ・アライアンス（Conscious Food Systems Alliance）の活動アドバイザーを務める、シャーロット・デュフォーさん、アフリカ、ザンビアにおいてザンビアプロジェクトのプロジェクトリーダーを務めるバーバラ・ハチブカ・バンダさん、そしてイギリスのイエイツベリーで秀明自然農法を実施している今橋伸也さんを講演者として招待し、司会は英国土壌協会のベン・

ラスキンさんをお願いしました。

セッションの会場は100人ほどが入る会場で、オンラインによるライブ配信も行われました。農業会議において精神性や意識改革を主に討議するというのはさすがに稀なことです。ですからどれほどの方が参加されるか、想像がつきませんでした。正直、一抹の不安もありました。しかしその懸念を吹き飛ばすように、会場は一気に満席となり、入場制限がかかるほどに大盛況でした。

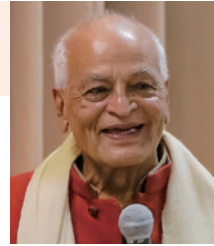
質疑応答では農業会議にもかかわらず、最初から最後までスピリチュアリティ（精神性）についての質問一色でした。いかにスピリチュアリティが大切か、どうすれば日々の生活にスピリチュアリティをとりいれることができるかなど皆真剣に聞かれ、質問が途絶えることはありませんでした。セッション後の感想でも多くの方が精神性や私たちの心の部分に触れる内容についてのセッションを行ってくれて感謝しているという内容が多々ありました。新型コロナウイルスによるパンデミックを経て、今まで以上に人々は人間同士のつながりや心のケア、意識の部分に重要性を感じていることが目にみてとれました。また、個人の精神面のみにとどまらず、社会全体として意識を高めることの必要性を多くの方が感じていることはあきらかでした。

今回のオックスフォードでの会議を経て感じたことは、人々は農業を単なる食糧生産の手段とみなしているのではなく、もっと包括的側面でもとらえているということです。

自然との調和、自然から学ぶ、大地に耳を傾けるなどの言葉が自然体で多くの人たちから発せられ、自然のエネルギー、力など見えないものへ意識を傾けることの大切さを話す時期が来たように思えます。見えない力こそが私たちの原動力なのです。秀明自然農法は単なる農法ではなく、その根本的理念は清浄な土壌、種の力を信じ、自然から学ぶということです。実施者は作物の声を聞き、慈しみの心で作物を育てます。そして、思いやる心、愛情が作物を育てていく上で重要なのだと悟るのです。自然を敬い、自然のリズムに合わせることで、私たちは心身共に癒やされ、健全な心と体を育むことができます。土壌を清浄に保ち、土壌自らの力を活性化することは私たちの心を、内なるエネルギーを活性化することができます。自然界のスピリチュアルな力を認識し、その恩恵に感謝をもって行動することこそが、よりよい社会を築くために必要なことなのではないかと思います。そして精神性を育むことが物質面だけではなく、内面の心の豊かさを育むのだと思います。

ORFC セッション

サティシュ・クマール



サティシュ・クマール

イギリスの思想家。9歳で出家しジャイナ教の修行僧となる。18歳のとき還俗。マハトマ・ガンディーの非暴力と自立の思想に共鳴し、核大国の首脳に核兵器の放棄を説く1万4千キロの平和巡礼を行う。イギリス南西部にスモール・スクールとシューマッハ・カレッジを創設。エコロジー&スピリチュアル雑誌「Resurgence」編集長



サティシュ・クマールさん夫妻 秀明自然農法しがらきの里にて

私は以前、京都に近い Shumei の圃場を訪ねました。そこはこれまで私が足を運んだ中で、最も純粋な農業の表れであると感じました。精神性が農業にどんな関係があるのか疑問に思っただ方は、ぜひ Shumei の圃場を訪ねてください。

私たちは皆食料を必要とし生産しなければなりません。自ら作らなくても、買い物はしますね。買い物はしなくても、少なくとも料理はしますね。もし料理をしなくても、食料品店でサンドイッチは買いますね。

私は家庭菜園をしています。母は小規模農家で、父は実業家でした。父はよくお金儲けのためではなく友人を作るために商売をしているのだと言っていました。これはとても精神性を表す言葉だと思います。私たちは友人を作るためにビジネスをするのであってお金儲けのためではありません。私は2エーカーの畑を持ち、15本のリンゴの木を育てています。1年のうちほぼ10カ月は農作業に割いています。ですから野菜を買う必要は無く、ジャガイモ、タマネギ、ニンニク、エンドウ豆、アスパラガス、イチゴ、ラズベリー、ブルーベリー、リンゴ、スイートコーン他、多くの野菜を栽培しています。ただ食べるために野菜を栽培するのではなく畑を愛しています。土を愛しています。ミミズも愛しています。ミミズの働きは素晴らしく、神秘的で不思議な魅力を感じます。ミミズは土の中で昼も夜も働き、ストライキを起こさず、賃金を求めず、休日を欲しがりません。ミミズは畑で活躍する最も精神的な、最も小さな労働者です。

皆さんが何をするにしても二つの側面があります。一つは現

実に必要なこと。電気代、電話代、住宅ローンなどを支払い、生計を立てることです。けれども、もっと深い側面があります。今は農業を話題に上げていますが、人生で何をするにしても、それを精神的な活動にすることができます。精神性は本の中にはありません。精神性は教会や大聖堂を指すわけでもなく、聖書やコーランなどの経典に宿るのでもなく、精神性は皆さんの意識に存在するもので、心の中に秘められ、愛にも通じます。何をするにしても愛情を込めて行えば、あなたは世界で最も精神性あふれる人になります。お金のためだけに活動するのであれば、あなたは最も唯物的な人です。単に唯物主義者になるか物質と精神の両方を追求するのかは、あなた次第です。しかし、物質そのものが決して清らかでないわけではありません。

ビッグバンにより、物質とエネルギーが存在しました。どちらもそれだけでは存在できません。物質とエネルギーが一緒になることで関係性が生まれ私たちは存在するのです。エネルギーとは何でしょう。エネルギーを測ることはできません。エネルギーは魂です。エネルギーは意識です。エネルギーは心です。ですから私たちの身体の中には思考、頭脳、分析、計測する力がありそれらは全て大事であり、科学的プロセスとして必要であるけれども、あなたたちの中心には心があり魂があります。それが私たちの感情の中心です。心は精神の中核として、感情の働きを司ります。あなたの愛、思いやり、寛大さ、友情、誰かを助けたいという気持ちは、あなたの心に起こる計り知れない衝動で、それが精神性なのです。

Shumei はその精神性を農業として実践しています。Shumei は農業だけでなく美術館なども運営しています。経済的に豊かなことは悪いことでなくお金をどのように使うかが重要です。もしあなたが100ポンド持っていたとして、リンゴを買うこともできますし、銃を買うこともできます。誰かのために使うこともできます。お金自体は悪くないのです。お金は中立的なもので、お金に付加価値をつけるのはあなた次第です。同じように言葉も中立です。言葉を武器にして人を傷つけたり、愛情を表現したりすることもできます。言葉は自分の意識、精神、心、魂、理解を表現します。どう言葉を使うかによってあなたの精神性が表れます。宗教自体が精神性ではありません。仏教、キリスト教、ヒンドゥー教はあくまでもラベル(名称)でありどの宗教に



雑誌「Resurgence」

属するかも自由です。精神性は心や意識の中に存在しています。私にとって畑を耕すことは精神的活動です。料理もそうですし夕食後に楽しむ皿洗いもそうです。私にとっては瞑想のようなものです。瞑想は目を閉じて座るだけではありません。瞑想はもっと心、意識を高めて行うものです。愛と思いやりと寛容さをもってお互いを尊重する行為は、全て精神性なのです。そして聴き手に音楽のように響く甘い言葉は、精神性の表れです。精神性は誰でも実践でき、教会やモスクにいる人たち、聖人や聖フランシスコやマザー・テレサに限られません。「私は普通の人間なので、精神性に欠けます」という方がいますがそれは違います。あなたはマザー・テレサ、聖フランシスコ、イエス・キリスト、仏陀と同じ霊的な、神聖な存在です。あなたは心、魂、精神を持っていて単なる肉体だけではありません。ただお金を稼いで、請求書を払うだけのために生きているとは思わないでください。それは目的を果たすための手段に過ぎません。その目的とは、愛情豊かで思いやりと寛大な心で、世界を変えるということです。そして自分を特別な存在と見なし、自分自身を愛してください。自分を愛せますか？ イエス・キリストは「汝を愛するように隣人を愛せよ」とおっしゃいました。イエスにとって自分を愛するのは当然であり、その精神性に基づいて自分と同じくらい他人を愛することを説かれました。自他を区別しません。

私たちが宇宙の型であり、太陽、月、両親、先祖が私たちの中に存在しそれら全てが私たちを形成しています。ビッグバンが起きて私たちは誕生し、それから140億年の間に私たちは心も身体も魂も進化を続け、今に至ります。ですから私たちの意識を宇宙大に高めましょう。

皆さん、心の中で意識を拡大してください。宇宙大の心が精神性です。その宇宙大の心で畑仕事や料理、洗い物をしたり、メールを送ったりすれば、そこに精神性が表れます。精神性とは、日曜日に教会に行って賛美歌を歌うことではありません。美しい歌自体は効果的に精神性を呼び覚ましてくれます。実際に毎日何をどのように、どんな心構えでするのか、それが精神的活動であり、精神性なのです。

私はジャイナ教の僧侶を9年間務めました。ある晩、夢の中に現れたマハトマ・ガンディーは私におっしゃいました、「何人が僧侶になれると思いますか？ わずかですね。では少数の僧

侶しか精神性を持っていないのですか？ 違いますよね。精神性は皆に備わっています。例外はありません。僧院を出て、日常生活の中で精神性を実践しなさい。普段の全ての振る舞いが精神的でなければなりません」と。僧院を出ることは禁じられていましたが、ある晩真夜中に、私は僧院から逃げ出し、ガンディーの隠遁所^{いんとん}に身を寄せました。そこでは料理や畑仕事をして、糸車で糸を紡いで服を縫い、全てにおいて精神性を実践しました。農業は精神性を育み高めるものですが、お金儲けの手段となり果ててしまいました。最終目標と手段に対する理解を誤ってしまいました。経済成長を目的とするのではなく手段と考え、人間関係や精神性、友情、人類の福祉、地球や自然への奉仕、人間の尊厳を目的に変えることができれば、自然の環境回復、地球全体の幸福を最終目標に掲げられます。しかし現状は自然を利潤追求のために利用しています。美しい社会を築くために経済成長を手段とすることは決して悪いことはありません。私たちが意識、精神、心、感情を高め、あらゆる行動、会話を精神性のあるものにしていけば美しい社会に替えることができます。私たちの行動全てが精神性を備えたものであるべきです。

私にとって農業、ガーデニングは精神的活動です。



メイン会場でのセッションの様子

今橋伸也



ブライト病



病気を克服したトマト

日本で3年、イギリスで19年、合計22年間秀明自然農法を実施してきました。今日は、スピリチュアルなアプローチを農業に応用した、私の経験についてお話ししたいと思います。まず、秀明自然農法についてご紹介しましょう。この農法は、20世紀初頭に岡田茂吉師によって日本で創始されました。今日では20カ国以上で実践されています。秀明自然農法の根本は、自然尊重と自然順応です。自然は私たちに全てを教えてください。秀明自然農法の三つの要素とは肥料・農薬・家畜糞尿を使わない清浄な土壌、自家採種の清浄な種子、農産物への愛情に満ちた農家の純粋な心です。私たちはウィルトシャーに5エーカーの農場を持っています。約40種類の野菜を生産しています。14年間、土に何も入れていないので、土だけで野菜を育てています。また私たちは、90%の種子の保存にも成功しています。自然のスピリチュアルな側面に気付く時、木々、山々、植物、土の背後には目には見えない霊的な力があることに気付きます。これにより自然に対する敬意と感謝が生まれ、それが私たちの行動を変えるのです。

2012年、イギリスは歴史的な冷夏に見舞われました。多くの農家が野菜作りに苦労しました。私の知る限り、近所のトマトは全てブライト病で枯れました。幸い、私たちのトマトはブライト病にはかかりませんでしたが、アブラムシが来ました。その頃、私はビニールハウスにトマトの苗を200本植えており、全てのトマトがアブラムシの被害に遭いました。そしてそれぞれのトマトの苗にアブラムシが何匹いるか数えてみると200～500匹いました。有機農家に対処法を尋ねてみたところ「少なくとも5回はオーガニックスプレーをかけなくてはならない。そうしないとトマトが全部枯れてしまう」と言われました。しかし、自然農法では農薬スプレーは使いません。私は土に触れ、「土さん、トマトさんを助けてください」と話しかけました。次にトマトに触れ話しかけました。「トマトさん、この寒さの中でも育ってくれてありがとう。人々を癒やすトマトを作ってください」。毎

今橋伸也

イェイツベリー園場にて秀明自然農法による野菜を栽培。国内外の各メディアで取り上げられる。現在 ユーチューバーとして自然農法を発信。チャンネル登録者は27,000名、総再生回数は300万回を超える



日話しかけると、それから2週間後、突然アブラムシがいなくなりました。そして全てのトマトの収穫に成功しました。

2014年のことです。ビニールハウスの天井に大きな穴が開いていました。6月に10日間ほど雨が續くと、その穴から雨が中に入ってきて、トマト1株を集中的に雨が直撃しました。すると、1株のトマトがブライト病にかかりました。その頃、私は600本のトマトの苗を植えていました。ブライト病はとても強い病気なので三日後に全てのトマトがブライト病にかかってしまいました。そこで、有機農家に対処法を聞くと、ブライト病から回復することは不可能なので、彼の提案は、「今年はトマトの栽培を諦めること。来年のために、トマトを全て抜き取り、ブライト菌を殺すために抜いた株を焼くことと、ブライト病は土の中にも生息しているので、もうこの場所にトマトを植えてはいけない」というアドバイスでした。そして、ブライト病にかかった葉をある程度切り、それから土とトマトに話しかけました。1週間後、トマトから新しい葉が出てきましたが、新しい葉は一瞬でブライト病にかかり、その後枯れてしまいました。

トマトから15メートルほど離れたところにジャガイモを植えており、ジャガイモはブライト病にかかる可能性が高く、1株でもブライト病にかかると、全てのジャガイモが枯れてしまいます。そこで、トマトを全部抜くことにしたのですが、50株ほど抜いた時にとても悲しくなりました。私はトマトを抜くことをやめ、土とトマトに真剣に話しかけました。それからさらに1週間後、つまり合計2週間後、どうなったのでしょうか？ トマトは枯れそうになりましたが、また新しい葉が出てきて、新しい葉はブライト病にかからなかったのです。そして回復し始め、無事にトマトを収穫することができました。

2014年、私たちの園場で開催したオープンデーに参加してくれた100名ほどの方たちに私はこの話をしました。すると、多くの人が驚き、ある有機農業クラブに長年所属している女性は、「トマトがブライト病を克服したのを見たことがない」と言いました。しかし、その後、毎年トマトを連作していますが、ブライト病にかかったことは一度もありません。

土や植物に対する敬意と愛情が、本来持っている力を引き出してくれるのだと思います。自然農法のスピリチュアルな経験を通して、私は土と植物に意識があることを悟り、20年以上、土と植物に敬意と感謝をもって秀明自然農法を実践し続けています。

バーバラ・ハチプカ・バンダ



バーバラ・ハチプカ・バンダ

ザンビア自然農法開発計画代表。2004年、UNDP(国連開発計画)が主催したパン・アジア・ユースリーダーシップ・サミットに参加した際、秀明自然農法と出会う。2005年より秀明インターナショナル支援のもと、秀明自然農法に取り組み始める。



ザンビアの女性組合員たち



自然農法ショーにて

ザンビア出身の私の旅は20年前に始まりました。当時、青年だった私は、2015年までにミレニアム開発目標^(※)を達成しようとUNDP(国連開発計画)が組織した青年の活動に加わりました。そして私は南部アフリカの地域代表の一人として日本で行われる青年会議に参加し、そこでShumeiと出会いました。会議のオプションツアーとしてShumeiのモデル圃場がある黄島を訪れたとき、そこで実践されている秀明自然農法に衝撃を受けました。

私の父は政治家で母はザンビアの農村にある女性の農業組合のリーダーをしていました。ですから私は小さい頃から農業に親しんできました。私が20歳のときに突然事故で母を亡くしました。以後、母の意志を継ぎ、女性たちの組合のリーダーとして活動するようになり、彼女たちの暮らしを少しでも豊かにすることに力を注いでいました。黄島で秀明自然農法に触れたとき、私が求めているものはまさにこれだと感じました。さっそくShumeiに連絡を取り、その年、2004年の11月にShumeiの担当者がザンビアに来てくれました。そして女性農家たちに会い、20軒がデモンストレーション農家となり、自然農法プロジェクトが始まりました。

秀明自然農法は、自然を尊重し自然に順応した農業ですという説明に若い農民たちは懐疑的でしたが、年配の女性農民たちが若者に向かって「あなたたちはこのやり方を笑っているけれど、私たちが幼い頃の記憶を思い出すわ」と植民地になる前の幼少期の体験を語りました。昔ながらの伝統的環境で育った世代は、代々受け継がれてきた昔ながらの農法を覚えていました。年配の女性農家が、若い世代の農家に知識を伝えているのは、素晴らしい光景です。物質的な価値観が尊重される今ではそのような生き方であったり感性だったり、大切なことがほとんど失われてしまっています。

私たちが彼女たちに自然農法を教えるうちに、在来種について話すようになりました。「あなたたちの両親はどんな種を育てていま

したか?」「この農村にはどんな種子がありますか?」と。彼女たちは皆口を揃えて、昔は種子に番号では無く名前がついていたと語りました。幸運なことにここには昔から続くメイズ(白トウモロコシ)とピーナッツの在来種が残っていたのです。私たちはその貴重な在来種を集め自分たちで小さなシードバンクを作ることにしました。女性農家たちは、「在来種の種はよく育ち、お店で買う種よりもしっかりと根を張り、味もおいしいです。伝統料理用にメイズを粉にすると、重さがあって味に豊かなコクが出ます」と言いました。在来種を自然農法で収穫した農家たちは、その違いを肌で感じ始めました。そして自家採種していくことで種子自体が環境の変化に適応し、気候変動にも耐久性の高い作物を確保できることも分かりました。こうしてプラス効果が見え始めたのです。これらのプラス効果には精神的側面が影響しています。けれども精神性を数値化するのは難しいです。ザンビアにおいて精神性と呼ばれるものは何世代にも渡って知識として受け継がれてきた土着の伝統的習慣と言えるでしょう。女性農家の何人かに、生い立ちについて語ってもらえるなら、育った環境が人生に影響を与えているのが分かります。彼女たちが作付けの頃を話すとき、どんなに楽しかったかと言って、顔が喜びで輝きます。今橋さんは土や作物に話しかけますが、アフリカ農民の場合は、皆の歌声が聞こえて賑やかです。ご存じのように、農民たちは手に鋤を持って、リズムを刻みながら歌います。その歌が農民の想いやエネルギーを伝え、農民と土と作物を結び付けるのです。しかしザンビアでの農業環境は大きく変わっています。例えば天候にしても、今は予報を気にしますが、昔はいつ雨が降るか気象庁に教えてもらう必要はなかったのです。農家に聞けば、野生の果樹から察することができたのです。果樹が雨の状態を教えてくれたのです。

ザンビアの雨季は11月から4月までで緑が茂り、一年で最もア

※ミレニアム開発目標、2001年にまとめられ、2015年までに達成すべきとされていた世界的目標。この目標は2030年に向けた国連の新たな開発目標である持続可能な開発目標(SDGs)に継承された。

フリカが躍動する時期です。雨季には生命が弾けます。しかし、今年は1月に入ってやっと雨が降ったのです。その上、雨が長く続くかどうか不明です。私たちの住むザンビア南部は、以前より砂漠化が進み、収量が下がり、農家は厳しい状況にあります。しかし、在来種を育てる自然農法は、異常気象であっても作物の生育状況が良く今まで通りの収量が期待されます。

このプロジェクトは最初 20 世帯でしたが、農民たちは助け合い、食料の確保と経済的自立を促すプロジェクトとして、今ではザンビア南部だけでなく西部、東部、中部に広がり、6000 人以上の女性農家に増え、成長を続けています。そして参加している農民たち自らが自然農法の発信もしています。彼女たちそのものがこのプロジェクトの発展の鍵なのです。それはアフリカ文化が「百聞は一見にしかず」だからです。アフリカ文化に限らずそれは世界中に当てはまると思います。例えば誰かが「こうすればあの作物は育つよ」と言うのと、その現場を目撃するのとでは、大きな違いです。確信

が生まれるのです。それがこのプロジェクトの展開です。

最後に、私の食文化によるおもてなしの話をしたいと思います。私の結婚祝いに「チランガ・ムリーロ」と呼ばれる伝統的な祝宴が催されました。全て伝統的な料理の振る舞いなので材料も全て当地のもので賄います。そのため、若い花嫁は田舎に出向いてこれらを購入します。家族の女性が全員集合し、食材を集めてたくさんの伝統料理に腕を振るい、伝統的な楽器に合わせて踊りながら門から入場します。女性はそれぞれ昔ながらの料理を提供します。これは私たちの文化、伝統であり、家庭料理には、私たちの精神性やエネルギーがこもっています。商業化が進み、物質主義に影響されて、全てが唯物的になるにつれ、失うものも増えます。

今日ここで話し合われた内容、また皆さんが持つ多くの知識や情報を次の世代に伝えていって欲しいと思います。なぜならこの大地、この精神性、この土壌、この世界は若い彼らに受け継がれるべきもののからです。

シャーロット・デュフォー



シャーロット・デュフォー

NGO団体やFAO(国連食糧農業機関)をはじめとするさまざまなグループと共に20年以上にわたり食料システムと食物に含まれる栄養素について研究。コンシャス・フード・システム・アライアンスの活動アドバイザーも務める一方、アナタダヨガと瞑想のインストラクターでもある。現在はフランスのブルゴーニュで夫と共にリトリートセンターを建設中。



セッション会場

私は栄養士の資格を持っていますが、料理は不得手で、トマトの育て方も知りません。にもかかわらず、私はFAO(国連食糧農業機関)で12年以上も働き、農学者や農業プランナーを相手に、栄養を主流に据えるよう勧告してきました。6年前なら満場の農家の前で精神性について、またサティシュさんら素晴らしい方々と並び、発表するとは思っても寄ってませんでした。精神性は皆にあるものとして、その精神性を食糧政策にどう反映できるのでしょうか？ 具体的にどう思いますか？ 私は精神性を農業生産レベルだけでなく、食料システムのあらゆる面で見直すこと、そして、私の人生の側面におい

て全て精神性が影響していることを述べたいと思います。

食料システムを検討する私たちが精神性の影響について初めて触れたのは、2013年FAOでの時です。持続可能な開発目標の作成を巡って、技術作業部会との意見交換がありましたが、参加者の多くはミレニアム開発目標のようなお互いに譲らない傾向から脱却したいと感じていました。そして、メールで技術的な討議をしていたとき、誰かが、「つながり」、「精神」という言葉を提示しました。すると、たちまち、会話に火が付き、全体が活気付きました。私は思わず、「皆を発奮させてくれ、その中核にあるのは目に見えないもののだ」と悟り



当日配布されたパンフレット

ました。国連や技術専門家に対して否定的な印象がかなりあるでしょうが、有給の労働時間を超えて働く人、最高のアドバイスをするために最高の研究成果や最高の手がかりを全て教えてくれる人などが、たくさんいます。私たちが懸命に働くのは、目には見えない熱い思いに火が付くからです。誰もが心にその炎を持っていますが、決して口火を切らないのです。その炎を見出して、祝福し表に出すとしたらどうなるでしょうか。それこそ世界が切実に求める変化を起こすための原動力になるのではないのでしょうか。

数年前、友人のデビッド・ナバロが手がかりをくれました。2015年、彼は国連事務次長で、2030アジェンダ-持続可能な開発目標の実施に関する事務総長の特別顧問に任命されたばかりでした。「新しい任務はどう？ かなり大きな仕事ね」と尋ねると、とても感動的な答えが返ってきました。彼曰く「持続可能な開発目標を掘り下げると、まさに変革の力が見えてくる」そして付け加えたのは「文面には無いけれど、残りの全ての目標を網羅する18番目の目標があって、それは愛と喜びだ」。私は、雷に打たれたような衝撃を覚えました。私たちが皆の心にある繊細な部分を衝かれたように思います。それ以来、私は友人たちとSDGゼロと呼んでいます、つまり土台であり、究極の目標なのです。なぜ私たちが、人々のより良い健康、より良い食べ物を願い、海を守ることを望むのか。それが私たちに喜びをもたらしてくれるからです。そして、私たちが限界を超えて惜しみなく努力するその原動力とは何でしょうか。それは愛の力です。私たちは地球を愛し、一緒に生きています。この共通の愛で私たちは結束します。それが本質的要素であると私は思います。私にとって、仕事における精神性とはまさに愛と喜びです。私がFAOを辞めたのは、SDGsのために働きたかったからです。その辞職は私自身の大きな転機とも重なりました。精神性とは、個人の歩む道、または個人の進む旅でもあると思いますが、個人の生き方において、その人の内面に関わる理由から、誰もが時折それを経なければなりません。それによって個人は大きな変貌を遂げ、働き方まで変えてしまいます。

私は瞑想の体験を深め、見極めたいと切望し、その瞑想から得たものを生活のあらゆる面に少しでも取り入れようと試

みました。すると、私はいつの間にか自然とつながるようになりました。そして、友人たちと地球の声を聴くという運動を起こし、この地球の叫びを国連気候変動枠組条約締約国会議(COP)政策の場に持ち込もうと考えました。ちょうど2年前、コンシャス・フード・システムズ・アライアンス事務局というのが国連開発計画の中にあることを知りました。今まで私がFAOで働いてきたことは、これからのために準備されていたように感じました。これは、世界の何よりも全員を結束させるものであると思いました。私は多くの旅をする機会に恵まれ、世界中の農家とつながる体験をしていきました。これは私たちの美しい多様性であり、その多様性を掘り下げると、その核心には美しい統一性があるのです。バーバラさん、今橋さん、サティシュさんが述べたことは、全てその統一された美を物語っています。精神性は、私たちの考えや言葉のみならず自分自身の行動、世界の一員として、誠実に生きることへと導くものだと思います。もし、精神性を国連での政策アドバイスの仕事に取り入れることの意味を問われるなら、複数の利害関係者が対話する場において、調和を生もうと意図する特別な空間や雰囲気を提供することです。それによって必ずしも意見の一致が得られるとは限りませんが、意見が対立しながらも合意に至ります。

私はよく自然に力を貸して欲しいとお願いします。あるいは、より大きな意識に助力を求めます。熱意を失わず、人々が本当に聞く耳を持つように促してください。つい最近、コンシャス・フード・システムズ・アライアンス、そして、FAOのパートナーと、食に関する分野で働く政策の立案者やアドバイザーを交えて、非公式に会合しました。食糧政策に不可欠な目には見えない要素について話し合いました。私たちは、精神性という言葉を避けたが、実は意外にも人々はそのような会話に飢えていました。その人たちの口から出てきたのは、本当に美しいものでした。それは、耳を傾けること、物事のペースに合わせること、置かれた場所で何が起ころうとしているのかに意識を向けること、人々を理解し、大地を理解することでした。多文化の混合グループが多数有り、どのグループからも同じような知恵が湧き出てきました。そもそも、私たちは皆知恵を持っています。今朝、某パネリストが知恵の持つ魔法のような力を失わないようにするためにもその存在の表し方に注意しなければならないと述べました。ですから、微妙なバランスを取るために必要な空間を作らなければならないのです。その空間には詰め込み過ぎたり、精神的重圧を掛けたりしないで、感情や体験を蓄えられる余裕がなければなりません。それが集団の意志を形成し、オンラインでつながる全ての人たちに、その波動や振動を世界的に広げることになると思います。

2024 ORFC Q&A



Q&A (左からアリス・カニングハム、今橋伸也、バーバラ・ハチブカ・バンダ、シャーロット・デュフォー、サティシュ・クマール、ベン・ラスキン)

質問1：私の住まいの隣にある土地が売却されました。何らかの建物が建設される予定となっています。医師による手術や治療スペースが足りないという理由で住民の中には医療施設の建設を望む声もありますが、私は“土地”そのものの価値に目を向けています。“土地”は、炭素を蓄え保水性を保つだけでなく、そこに生息する生き物たちが安住できる場所を保護するために必要と考えるからです。建設することはすでに決まっているので、“土地”の価値を訴えるために私が取れる手段としては、ここに木を植えるというアイデアしか浮かびませんでした。他に良いアイデアがあれば、お聞かせください。

バーバラ：アフリカの視点で話をしようと思います。アフリカ社会は、最近あらゆる面が物質主義的となり、全てが近代化したため、特に病院や医療看護が求められています。おかしなことに、これだけの需要がありながら、医療システムは崩壊しつつあります。医師は診療現場に赴きもせず、別件でストライキを起こしています。常にそれがニュースで報道されています。私は、あなたの土地に対する思いやコミュニティが失われていることに対する悲しみがよく分かります。本来コミュニティとは単なる建物や家屋の集まりではありません。住人同士が会話をしないような場所はコミュニティとは呼べません。コミュニティには多くのものが存在し、住民全体を結び付けているのです。しかし、今はつながりを持とうとしない人たちが増えています。政策決定者対農家という見方もありますが、そういう考え方をやめる必要があります。私たちは政治家や市民社会を巻き込む

必要があり、あなたも政府官僚や地元議員を巻き込んでコミュニティとして運動を起こす必要があります。木を植えて大地の悲鳴を代弁するだけでは足りません。あなたの熱意を具現化するためにはまず小さな運動を始めて、地元議員に会話に加わってもらってください。その土地は売却されるかもしれませんが、また別の場所でそのようなコミュニティを作り、あなたがその担い手になれるのではないのでしょうか。

ザンビアの秀明自然農法は、当初20世帯の農家が今や6000世帯以上に成長した経緯をお話しましたが、私はもっと増えたと見込んでいます。Shumeiだけによる自然農法開発プログラムや外部からの資金援助だけでは、その拡大に限界があります。より大きな目標に向かうためには地元の指導者や役人の支援が不可欠です。元の場所と同じくらいあなたにとって美しい安全な場所を築くためにも地元のコミュニティを巻き込んで、あなたの考えや気持ちを共有してください。

質問2：スピリチュアリティと組織化されたさまざまな宗教について、まるで別物であるかのように語られることがあります。スピリチュアリティと組織化されたさまざまな宗教をどのように調和させればいいのでしょうか。

また、世界の宗教は世界の土地の16%を所有しており、重要な役割を担っています。組織化された世界の宗教が土地に対する責任に目覚めるにはどうすればいいのでしょうか。



ORFC 会場の様子

サティシュ：インドに生まれたらヒンドゥー教徒、中東で生まれたらイスラム教徒、ローマやヨーロッパで生まれたらキリスト教徒というような宗教の多様性を祝福すべきです。宗教は川のようなもので、インドではガンジス川、イギリスではテムズ川というように呼び名は違って流れる水は同じです。よって、宗教と精神性を和合させるには、宗教の名前の違いに捉われないことと奥にある宗教そのものが唱える愛、優しさ、思いやり、寛大さ、奉仕に目を向けるべきです。これらは全て精神的価値観です。ですので、イギリスにいるイギリスで生まれたあなたをイギリス人、インドで生まれた私をインド人と呼びますが、私たちは同じ人間です。イギリス人、インド人、中国人、アフリカ人の誰であっても構いません。私たちは多様性を祝い、それを越えたところにある統一性を見るべきです。ヒンドゥー教徒、イスラム教徒、キリスト教徒のどれかという前に、私たちは精神的存在なのです。キリスト教はヒンドゥー教より上、ヒンドゥー教はキリスト教より良い、イスラム教はユダヤ教より素晴らしい、ユダヤ教の方がすごいというのは、イギリス人はフランス人より優秀、ロシア人はアフリカ人より上等というのと同じで、ばかげた話です。そのような狭い枠を外して、多様性というラベル(名称)に貼り替え、言語、宗教、国籍、政治体制、経済体制をはじめ、あらゆる多様性を賞賛するなら、多様性と統一性は手を結びます。精神性は統一性、宗教は多様性を表し、両者が手をつなげば調和をもたらします。

ベン・ラスキン：イギリスでも教会が圃場の多くを所有しており、そのため土地所有者と実施者との話し合いは難しいものがあります。所有者が実施者の思いをくみ取れるとは限りません。しかし、今後はそのような交渉をしていかなければいけません。影響力のある人たちや土地所有者に効果的に話をするのに Shumei は今までそのような交渉に成功しているように思いますが、どのようなアプローチを行っているのですか。

アリス・カニングハム：私たちのアプローチの方法は基本的にシンプルです。なぜなら決して秀明自然農法の認知度が高いわけではないからです。秀明自然農法のことを全く知らない人、土地所有者などには実際に見てもらうことが一番効果的です。私たちは他人の考え方や反応などを変えることはできませんので、相手の考えを変えようとするのではなく私たちの行っていることを見てもらい、それを理解してもらおうよう努力するしかできません。相手が理解できるように行動で示す方が説得力もあると思います。それから、日本ではどんな宗教も受け入れる一方、ある意味どの宗教にも属さない人が大勢います。日本面白い国で、生まれた赤ん坊は神社にお宮参りをし、結婚式はキリスト教会で挙げ、埋葬は仏教のお寺で行われることに何の違和感も持ちません。一宗教を信じ切っていないかもしれませんが、宗教を生活の一部として全てを受け入れる多様性を持った人種であり、人との交渉を行う時などに非常に役に立ちます。Shumei は基本的には、全てを受け入れる体制を持ち合わせています。特定の宗教に所属していなくても信仰を持っている人は多いはずです。私たちは世界人という観点のもと、この地球上に住む同じ人類として皆それぞれに地球に貢献をしていると考えています。

Shumei は自然農法を精神的活動として捉えていますし、自然農法の実践を通して地上天国、すなわち理想の世界を築くことができると信じています。ですから自然農法は単なる農業ではなく持続可能な社会を構築するためのアプローチなのだと思います。なぜならば、自然から学び、自然を愛し信頼し、自然の声に耳を傾け、自然と調和して生きることを学ぶからです。この同じ理念が人間関係にも言えると思います。国土が狭い日本ではビルに囲まれて過ごすことも稀ではなく、ご近所さんとの問題も生じがちです。ですが、その時に私たちにできることは、相手を変えるのではなく、私たちが素晴らしい理想の場所を提供する

ことです。周りの人たちが理想の環境を見て、接することで感化を受けていくように努力することしかできません。ですから私たちは小さな規模の憩いの場を作ろうとしています。その憩いの場を私たちの近所、友人、家族皆に共有していきます。それぐらいしか私たちはできませんが、そうすることで愛情や喜びが共有され、それが私たちの原動力となり、地球や生きとし生けるもの全てに対して、寛容があり助け合いの精神が育まれていくのではないのでしょうか。愛情や人を思いやる心が一番大事であることは皆が認識しているはずです。ただ私たちに今必要なことはほんの少しの勇気であり、その愛情と喜びを一人でも多くの人に共有し、社会のために貢献するという努力を日々の生活に取り入れることしかできないのではないのでしょうか。

質問3 : オンラインで参加している人からの質問です。精神性を高める意識を持ち、自分たちの意見や考え方を押し付けたりせず、自然体で周囲を感化させるにはどうすれば良いでしょうか。

バーバラ : Shumeiの担当者が初めてザンビアに訪問した際、いきなりShumeiの考え方を押し付けたりせず、まず彼是我们を理解しようとし、一緒に歌い、踊り、交流することで信頼を深めていきました。まずは秀明自然農法についての知識を共有することが必要で、そのために自然農法ショーを行いました。女性の農民だけでなく、彼女たちの伴侶や、子ども皆が楽しめるように、スポーツの試合をしたりしました。また伝統的な料理も振る舞い、皆が楽しめる場で自然農法の野菜の展示もしました。そのような環境で自然農法の説明をすることがとても効果的です。皆で祝い喜び合うことで自然農法のことを知っている人が知らない人へ紹介し、どんどん輪が広がっていきました。私も精神性を押し付けてはいけないと思います。例えばこのORFCの私たちのセッションには、チラシを配りそれに興味を持った皆さんが集まったように、人に共有し伝えていく、そういうアプローチが良いのではないかと思います。ORFCに最初に参加した時はイギリスに特化した内容で疎外感を感じましたが、今回は多様性に富んだ形になり、こういう動きこそ調和が広がっていくことなのではないかと感じます。そして今回自分も皆さんの一員だと感じられました。

シャーロット : 個人レベルでは、他人を変えたり、強制したりすることはできません。ですので、自分の光を輝かせることが大事だと思います。それにより、他の人たちを惹きつけ、その人たちの光をも輝かすことができると思います。

質問4 : 心身共に健全で幸福であるために、もし日々取り組まれていることがあったら教えてください。

サティシュ : 何か一つのことによって心身共に健全になれることはありません。どんなことをするにおいても、そこに意識を持って行動することで精神的な豊かさが得られると思います。私が毎朝取り組んでいることは、妻とは50年以上連れ添っていますが毎日一日の始まりに、一緒に何か精神的に感化するような書物を読みます。例えばダライ・ラマや松尾芭蕉やShumeiの書物などです。私が何かアドバイスできるとすれば、パートナーや配偶者がいるなら、その人と共にインスピレーションを与えるものを取り入れて一日を始めてください。もし、お独りなら、ただ朝食を取るのではなく身体のための朝食のように、精神的に感化されるものを取り入れ、意識ある時間を過ごしてください。それは一種の瞑想かもしれません。しかし、中には瞑想が苦手な方もいるでしょう。その場合でも、何か美しく、感動的で、精神的に導いてくれるものを読むことは、人間関係にとっても良い影響を与えます。私たち夫婦は一度も喧嘩をしたことはありません。なぜなら、そういった精神的に感化されるもので一日をスタートするからだと思います。私たちは識者だけでなく先祖からも多くの知恵を授かってきました。そのような素晴らしい精神的な教えに意識を持って毎日を過ごせば良いのではないのでしょうか。

アリス : その他にShumeiがいつも実践しているのは、毎日必ず感謝することです。頂く食事への感謝、その日健康であることへの感謝などです。常に感謝を心掛け、その感謝を分かち合います。それが私たちの取り組みです。

ベン : シャーロット、バーバラ、毎日されていることはありますか。

シャーロット : 必ず毎日「ありがとう」を言葉に出すことを心掛けています。

バーバラ : 私は世界のささやきに耳を傾けるよう努めています。この20年間でたくさんの経験をし、Shumeiとの関わりで生活も充実してきました。一方で、多くの悲劇も体験しました。悲劇とは、意欲を失わせるようなことです。しかし、そういう時に世界の様々なことに目を向け更に耳を傾けることで、私の苦悩に対する様々なメッセージを受け取ることができ、自分を奮い立たせることができたのです。人生はメッセージにあふれ、あなたの苦悩に答えをくれます。よって、共有することも大事ですが聴くことも同じくらい大切です。

シャーロット : 私はよく飼い犬と一緒に森林を散歩しますが、森林を歩いている時に自然に身を委ねて自分から自然に問いかければ、質問に対して自然がメッセージを与えてくれます。あなたもそのメッセージを受け取れば、それはあなたにとって良い影響を与えてくれると思います。



ザンビアプロジェクト2023年度 活動報告

NADPZ (ザンビア自然農法開発計画) 代表 バーバラ・ハチプカ・バンダ

教育を通じて未来に希望を

9年前の2015年8月、アラン・今井氏（NADPZの発足から現在に至るまでプロジェクトのサポートに従事している秀明インターナショナル理事）とShumeiの青年たちはプロジェクトの10周年を祝うためにザンビアを訪れ、ペンバ地区のプロジェクトサイトでコミュニティスクールの最初の二つの教室をオープンしました。この学校プロジェクトは、次世代の農民を教育することを目指しており、基本的な科目の指導だけでなく、カリキュラムの一部として秀明自然農法のような課外活動にも焦点を当ててきました。

ささやかな学校として始まったプロジェクトは、その後大き

く進化し、2018年には二つの教室が追加されました。そしてこの度、安全な倉庫を備えた新しい教室が更に二つ建設され、教育における誠実性を守り、教材を安全に保管する設備が強化されました。

2023年8月20日、アラン・今井氏と地区委員長が、新しく造られた教室の開所式を行いました。これらの新たな教室の追加は、増加する生徒数、特に5年生と6年生の生徒に対応する上で重要な役割を果たすことになります。開所式の際、地区委員長は、コミュニティスクールの建設とShumeiの支援に心からの感謝の意を表しました。

パンデミックの影響により世界の教育システムは大打撃を受け、感染拡大から国民を守るために学校が閉鎖され、多く



新しく造られた教室



コミュニティスクールの生徒たち



新しい校舎の完成を祝う子どもたち

の生徒が家に留まることを余儀なくされました。それでもなお、私たちの学校は成長し続け、現在 120 名の生徒が在籍しています。現在学校には 4 名の教師がおり、政府の支援を得て、近く学校とその教職員を管理・運営する校長先生が就任する予定です。今では教師が増え、コミュニティのパートタイムの教師も増えてきましたので、生徒と教師が管理する秀明自然農法のガーデンを拡大する計画が行われています。また、美術のクラスを増やし、陸上競技、サッカー、ネットボールを含むスポーツプログラムの追加も計画しています。教室が増えたことで、今やコミュニティの新たな生徒たちも入学する機会を持つことができ、学校は成長を続けています。いつの日か初等教育と中等教育を兼ね備えた学校になることができるでしょう。これにより、卒業生はさまざまな分野で大学に進学し、コミュニティの発展に貢献することができるよう願っています。私たちはこのコミュニティースクールの成長を楽しみにしており、それが子どもたちの心を育み、より良い未来を作り出す手段となることを期待しています。

職業訓練センターで人生が変わる

2020 年 1 月に設立されたカベタ職業訓練センターは、学校を卒業した 18 歳から 25 歳の青年たちの生活に大きな影響を与えています。このセンターは、若者に大工仕事、溶接、裁縫、料理などの貴重な技能を身に付けさせることを目的としています。センターではこれらのスキルを提供することを通して、生徒たちに環境意識と個人の成長を重点としながら、自分自身とその家族のために収入を得ることができるようにします。

今回はカベタ村に住む 4 人の子どもの父親であるフェデリリス・ムチンバ (25 歳) を紹介します。フェデリリスは弟とともに両親の死後孤児となり、親戚の村で暮らしています。カベタで生まれ育った彼は、弟、妻、子どもたちをサポートする方法を精力的に探してきました。

2022 年 1 月、秀明自然農法を実施している組合のメンバーである叔母がカベタ職業訓練センターへの入学を勧めたこと

で彼の人生に転機が訪れました。そして彼は、彼女のアドバイスに従い、1 年間の大工コースに入学しました。決意と努力の結果、彼はプログラムを無事に修了し、2022 年に卒業しました。私たちのプロジェクト担当者は、卒業後の彼の生き方と、ベッド制作で忙しくしている状況に感銘を受け、彼に取材を行いました。

彼は、仕事の依頼には変動がありながらも、少数の注文でも家族を養うためのお金を稼ぐことができています。彼は妻と一緒に小さな自然農法菜園で野菜を育て、愛する家族に衣服や食べ物を確保できるようになりました。彼の妻はその農産物を近くの地元の市場に持ち込み、そこで新鮮な野菜を販売しています。同様の悩みを持つ他の若者たちに与えるアドバイスとして彼は次のように語ってくれました。「決して諦めないこと。ネガティブな環境に埋没するよりも、ポジティブに忙しくしているほうが良いのです。神様は頑張った人にご褒美を与えてくれる」と。自分自身と仕事においても成長の機会を得て、人生を変革させた実績から彼の忍耐力と決意は他の人々に感化を与えています。

フェデリリス・ムチンバのサクセスストーリーは、カベタ職業訓練センターが若者の人生に大きな変化をもたらしていることを示す一例に過ぎません。このセンターは、職業スキルのトレーニングを提供し、環境意識を高めることにより、生徒が自立し、地域社会に貢献できるように支援します。訓練センターは、一人ひとりの人生を変え続けており、私たちは彼のよう多くの青年たちにポジティブな影響を与えていることを誇りに思っています。



職業訓練センターの生徒たち



大工作業の様子

自然農法の拡大 - 新たな地域へ

NADPZ は、ザンビアの他のコミュニティーから、ムババラ、ペンバ、チカンタのコミュニティーで確立された秀明自然農法プログラムについて学びたいという要望を毎年、受け続けています。秀明自然農法のメッセージは、口コミや私たちの年次イベント、例えば自然農法ショーなどを通じて広まっています。地元コミュニティーのリーダーたち、つまり村長、酋長、^{しやうちやう}コミュニティー、地元農業普及員、地区コミッショナー、地元の議員などによるサポートと推奨が、人々の関心を高め、プロジェクトの拡大の機会を提供してくれています。

在来の種子の管理者は 2005 年の自然農法プロジェクト開始以来、自家採種を行っています。持続可能な農業である秀明自然農法、そしてその種子保存の成功に不可欠な点として農村地域開発への女性の参加があげられます。女性は労働力として、また変革の弾みとしての役割を果たしており、女性の参加が極めて重要です。女性は在来の種子を育てる上で重要な役割を果たしているだけでなく、コミュニティー開発の最前線にも立っています。彼女たちの参加が力を与え、農業実践を強化し、コミュニティー全体の生計を改善しています。

2022 年 7 月、プロジェクトマネージャーと秀明自然農法の訓練チームがザンビア中部のムンブワ地区女性組合を訪れ、9 つの農民クラブから参加した 109 名の新しいデモンストレーション農家に研修を行いました。2023 年 4 月、私たちは彼女たちの招待を受け、中部州を訪問、女性グループとその支援パートナーに会う機会を持ちました。私たちは熱烈な歓迎を受け、地区コミッショナーと女性支援プログラム・コーディネーターも迎えてくれました。小さな農業ショーが企画され、女性たちは、季節野菜の乾燥品や彼女たちのトウモロコシの種子と他の農産物の種子、野菜などの展示もしていました。私たちの献身的な世話役であるメシー・ムロタが、首都ルサカで開催された女性の農村支援農業会議に出席したことが、ムンブワ地区への進出のきっかけとなりました。この会議で、メシーはムンブワ地区女性組合の組合長と会う機会に恵ま

れ、それぞれの地域で行われているプロジェクトや取り組みについて詳しく語り合いました。組合は秀明自然農法の変革力に魅了され、会員たちに更に力を与えるために必要である道と確信するようになったのです。アラン・今井氏がムンブワ地区女性組合を訪問し、彼女たちに在来の種子を提供しました。これらの種子には、より明るく持続可能な未来が約束され、この種子が成長し、確実に未来に受け継がれることを期待します。これらの在来の種子はザンビアの独特な環境に適応して繁栄し続けるため、気候の変化に直面したときの回復と持続可能となる指標となります。

このパートナーシップによって豊かな収穫がもたらされるだけでなく、ムンブワの女性たちが秀明自然農法の原理を通じて繁栄する力を得ることができると確信しています。

自然農法ショーのハイライト 伝統とコミュニティーの祭典

7 月と 8 月は、待望の 2023 年自然農法ショーの開催に向けて献身的な女性たちが精力的に働き、熱心な準備が行われました。

2005 年に始まったこの年次イベントは、自然農法実施メンバーが秀明自然農法の原理について、広範な地域の人たちと交流し、啓発（教育の意味も含みます）するための場として機能しています。また、ダンス、音楽、料理を紹介し、活気に満ちた伝統文化を満喫する機会にもなっています。ムババラ地区女性農民組合のリーダーとさまざまな女性農民クラブは今年のショーを組織化する責任を担っていました。このイベントには、マンボ地区、カシヤ地区、デム地区からなるペンバ地区農民組合だけでなく、チカンタ地区の組合員も参加しました。今年のショーの心温まる側面は、プロジェクト創設期に中心的な役割を果たした先駆者たちが積極的に参加したことでした。

8 月 21 日から 23 日にかけて行われたショーには、初代組合長や組合書記などの元指導者らが出席し、組合員として、



ムンブワ地区女性組合の組合長(右から 2 人目)とアラン・今井氏(左端)



ザンビア東部、シンダ村の農民たちと



自然農法ショーにて種や作物の展示



その経験を活かしイベントに貢献してくれました。また彼らは、プロジェクトの推進に貴重な政府の地域開発基金を利用する手法も惜しみなく共有してくれました。今年のイベントの主賓は全ての組合活動の監督責任を負う酋長の代理人でした。彼は挨拶の中で、過去 20 年にわたる Shumei の支援に感謝の意を表しました。そして地域内で皆が協力して努力することの重要性を強調し、女性たちに対してあらゆるプロジェクトを開始するためにも自分の時間とエネルギーを捧げることを促し、そのことは彼女たち自身を力づけ、地域開発だけでなく各家庭での経済環境の向上にもつながると説きました。

近年の予測不可能な雨季にもかかわらず、参加農家は秀明自然農法のトウモロコシ、ピーナッツ、キャッサバ、乾燥野菜、サツマイモなどの豊かな作物を展示しました。特に Shumei から寄付されたミシンを使用して衣服を作った女性たちは、

自身の縫製技術を誇らしげに披露していました。開会式は、楽しい歌と踊りを特徴とする活気に満ちた伝統のダンスから始まり、またイベントに華を添えた Shumei の 3 名の青年を歓迎する機会でもありました。彼女たちは、ザンビアのチテング生地を使用した日本の伝統的な浴衣とチャイナドレスの衣装を着て登場し、ザンビアと日本文化を兼ね備えた印象的な衣装を披露してくれました。

このイベントは何百人もの子どもたちや若者が熱心に参加しており、コミュニティ内の人口動態の変化を示唆していました。この変化は、若者が将来農業コミュニティプロジェクトに携わることの必要性を強調していました。このプロジェクトが次の世代に引き継がれ、アフリカ全土に広がることを願っています。

2023年を振り返り、決意をもって 2024年に前進する

2023年、このめまぐるしい一年、私たちは、喜び、失望、ストレスなど、数えきれないほどの思いを経験しました。しかし、貴重な教訓を与えてくれる成功とチャレンジの両方が織り込まれている、それが人生というタペストリーです。

今年のNADPZはベテランと新人が協力して、信念・経験・決意・希望に満ちたリーダーシップを発揮できる環境の中で、強烈な熱意をもって2023年の戦略を作り上げました。過去の論争にとらわれず、18年ぶりに新旧のリーダーが共通のゴールに向かって、同じビジョンと方向性をもってプロジェクトを協力して主導するという画期的な瞬間が訪れたのです。

2023年のテーマであるE3（Expansion 拡大・Education 教育・and Entrepreneurship 企業家としての活動）の拡張計画は、私たちのメッセージを地域社会だけではなくザンビア全土に広げ、コミュニケーションしていくというものです。真の持続可能性には、さまざまな要因が含まれていることを認識し、女性が生計を維持していく上での秀明自然農法の役割と、教育と企業家としての活動を含む私たちのアプローチを強調します。

2023年の農繁期は豊かに実る耕作地と豊富な雨で希望に満ちたものでしたが、年の初めには、雨季の遅れにより、私たちのトウモロコシはゆっくりとしか成長できませんでした。しかし、私たち女性農家の決意はゆるぎなく、あらゆる気候変動に備えて、雨の吸収を最大にするための敷草などを懸命に準備しました。また嬉しいことに、中央と東の州から、複数のコミュニティグループが新しく私たちの仲間入りをしました。秀明自然農法の種を供給し、これらのグループの新たな旅の始まりを見守っていきます。

教育は私たちのプロジェクトの基盤ともいえる重要なものです。Shumeiのサポートにより誕生したペンバのコミュニティースクールの新教室は、入学者数の増加を促進するだけでなく、この学校が試験センターとしての役割を担う道を開き、地域の学生たちに利益をもたらすものです。

カベタ職業訓練センターには、大工仕事、裁縫、料理教室、電気配線などを学ぶ、新しい設備が増えました。これにより、学校の卒業生には、より質の高い職業訓練が提供され、学校に通っていない若者にとっても、貴重なスキルを身に付けることで、生きるための能力が保証されるのです。

2023年の自然農法ショーでは十代の若者や、学校に通っていない更に年の若い世代に合わせて、音楽や芸術を含むカリキュラム拡大の必要性を認識しました。と同時に、重要な認識となったのは、農村コミュニティにおいては、プロジェクトを自主的に推進することは簡単ではない、ということです。彼らはいくつもの短命なプロジェクトを経験してきたことで、新しいプロジェクトに対してとても懐疑的になっていました。しかしその懐疑論を克服し、徐々に自立し、プロジェクトの持続性を相互に支え合うようになりました。19年経った今も、彼女たちの献身的な活動と責任感があるからこそ、長期にわたって成功しているのです。彼女たちの素晴らしいリーダーシップと長期的に持続可能なモデルの構築に焦点を合わせた活動は、私たちの最も誇りとする成果です。

2024年に入り、私たちは引き続きE3のテーマ、拡大・教育・企業家としての活動に取り組み、努力していきます。雨季の予測がでず遅いスタートではありましたが、私たちはメンバーにゆるぎないサポートを約束し、農家にとってより良い一年になることを願っています。

2024年、更なる進捗をシェアできることを心待ちにしています。

そして決意と希望をもって私たちの旅が続けられますように。



バーバラと日本の青年たち



種を受け取った農民たち

ザンビア研修に参加した青年の感想

秀明インターナショナルでは、人材育成を目的にザンビア自然農法プロジェクトに青年を派遣してきました。今回、2023年8月18日から29日までアラン・今井氏と共に3名の青年が研修に参加しました。



ザンビアでは、秀明自然農法を通して多くの方が幸せになっていることを肌で感じる事ができました。自然農法は農民から農民へと技術などが伝えられており、さまざまな地域へと広がっています。自然農法ショーでもトマト栽培者、鶏の育て方、蜂蜜の取り方など農民がステージに上がり自分の経験や感謝を堂々とシェアしている姿はとても印象的で、多くの農民が自発的に自然農法を行い、自信を持ち感謝で行っていることが伝わってきました。

また、Shumei のザンビアプロジェクトはただ利益を生み効率的に生産することが重要な事ではなく、彼らの生活がより豊かになり、彼らが自分たちの力で生きていけるようにサポートすることを目的としていることを教えていただきました。Shumei はあくまでも自然農法という農法（生き方）を共有しているだけで、実際に自然農法を実施し、家を建てて、自然農法ショーを運営して、種を来年に残しているのは彼ら自身であるからこそ、農民たちは当事者意識を持ち、活動を行えているのだと感じました。

彼女たちは、今後はまだ自然農法を知らない、困っている多くのザンビアの人たちに自然農法を伝えたいと夢を語ってくれ、自然農法をすることに誇りを感じていることが強く伝わってきました。

(N.T.)

ベンバ地区にある小学校やムババラ地区での自然農法ショーを通して感じた事は「豊かさ」です。本当の豊かさとは何か。必ずしも物質的なものが豊かさにつながるのではないということです。目の前のことに追われている日本人よりも私が出会ったザンビアの方々は生き生きとしている感覚がありました。あるものをどう活かしていくか、全て自分自身の心の持ちようだと思います。また、喜怒哀楽を自分の心が感じたままを表現している姿を見て一緒に過ごす時間がとても心地良かったです。嬉しい時楽しい時一緒に踊って笑って、悲しい時は一緒に泣いて、何気ないひと時がかけがえのない人生の時間だと思います。日々何かに追われている競争社会にはない、「生きている」という感覚が全身に巡っているのを感じます。

ザンビアの土地はほとんど高い建物や明かりがないので夜は星空が広がっています。この地球で人間として生まれ、「今」自分があるということが奇跡だと感じました。朝日が昇って夕日が沈むという自然の摂理が狂うことなく繰り返され1日1日という時間が流れていくのを全身で感じます。一人ひとり使命をもって生まれて特徴や個性があり、この地球と宇宙の美しさに思い耽りました。

今回ザンビアに行かせていただき、みんなそれぞれ色が違ってみんな素晴らしい、どんなことも全て素晴らしいなと感じています。

宇宙から見たら本当にちっぽけな存在で私に何ができるのかまだ分かりませんが、それでも挑戦を続けていきたいと思います。

(S.S.)



30 時間のフライトを経てザンビアに到着。衛生や治安など心配していましたが、実際には訪れたどのお手洗いや非常に清潔で、治安も良好でした。道路脇には鶏や豚、牛、羊が自由に歩き回る光景が広がり、籠に閉じ込められるのではなく、自由に動き回っていることに驚きました。伝統的な衣装を身にまとった女性たちが重い荷物を頭にのせる姿もとても印象的でした。しかし、携帯電話の普及や外国の影響を受けた若者のサブカルチャーの進展とともに、異なる側面も目にしました。

最初に、ベンバ地区の小学校を訪れました。6 年前は幼稚園児だった子どもたちも今や 5 年生で、流暢な英語を話し、先生を手伝ったりしています。多くの支援者の協力のもと、教室が増えていることに喜びを感じました。

農民にインタビューした時に、自然農法が始まって、子どもたちが教育を受けることができるようになったことや、1日1食から3食に変わったことなど、笑顔で感謝の気持ちを伝えてくれました。

私は子どもの頃、アフリカは貧困と感染症が広がっている場所だと教えられました。そのときから、自分に何ができるのかと考えていました。Shumei を通じてこの理想を実現することができるとは、夢にも思っていませんでした。ザンビアの人たちはとても幸せそうで礼儀正しく、生活のベースがゆっくりとしていました。今回の訪問で農民から多くのエネルギーを受け取ることができました。

このエネルギーは、今後のチャレンジを乗り越える力となり、感謝の気持ちでいっぱいです。今後、国際支援に励ませていただきます。

(S.W.)



伝統ダンスを踊るコミュニティー
スクールの生徒たちと



現地の布で作った浴衣とチャイナドレス



ヤンナさんと職員たち ソアキロンガの圃場で

マダガスカルの秀明自然農法による子どもたちの支援

Shumei マダガスカル担当 更谷 浩幸

マダガスカルにおいて Shumei が現地のアソシエーション「アグリナチュール (AGRINATURE)」と共に秀明自然農法の普及、支援活動を始めて今年で 11 年目になります。

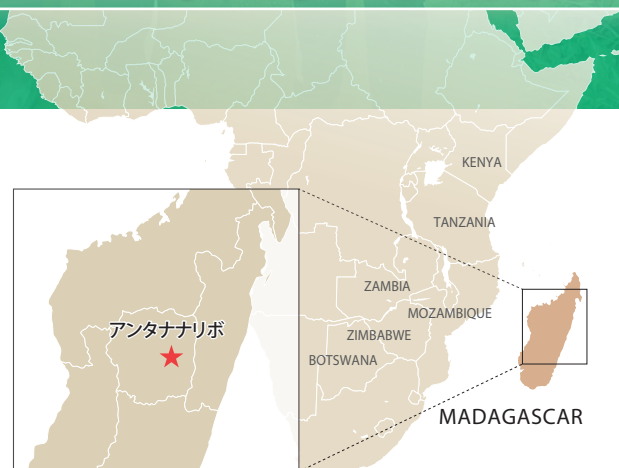
マダガスカルは、日本の約 1.6 倍の国土を持つ、アフリカ大陸の東側、西インド洋に位置する島国です。首都はアンタナナリボ。人口は約 3000 万人で、労働人口の約 8 割は農業に従事しています。主食は米で、香辛料やコーヒー、カカオが生産、輸出され、バニラにおいては世界最大の生産国です。

気候は、気温が高く降雨量が多い 11 月から 3 月までの雨季期間と、比較的低温でほとんど雨が降らない 4 月から 10 月までの乾季期間がある首都圏の内陸地と、一年を通して熱帯気候である海岸部に分けられます。バニラやカカオは海岸地域にて栽培されています。

マダガスカルは、世界で最も貧しい国に分類され、国民の約 8 割が 1 日 2 ドルで生活しています。

公用語は、マダガスカル語とフランス語。かつてフランスの植民地であったことからフランス語を話す人も多くいます。

宗教は、国民の 85% がキリスト教徒で、イスラム教徒もわずかですがいます。



マダガスカルでの秀明自然農法活動の経緯

アソシエーション「アグリナチュール」は、2013 年に Shumei と出会ったマダガスカル在住のヤンナ・アンドリアンバロさんが、秀明自然農法の自然尊重の理念に感銘し、マダガスカルの自然と農民を救うために創設されました。ヤンナさんはそれ以前、ソロプチミスト (Soroptimist International) に所属し、女性農民の支援活動をしていました。その活動を通して、農業技師であるナイナさんと出会いました。ナイナさんはアンタナナリボ大学にて農業を学びマスターまで取得しました。以前は、農薬や肥料を売る会社に勤め、それらによる現代農業の弊害に気がきました。アソシエーション「アグリナチュール」には創設時から加わり、農民への指導、実践者のお世話をしています。2014 年にはドイツのシュタインフルト圃場にて秀明自然農法の研修を体験しました。



Shumei、ソアキロンガ、アグリナチュールのパートナー看板

現在の活動について

以前は、ナイナさんが首都アンタナナリボ郊外の農村にて、自然農法に関心を示す農民グループに講習会を行い、実践し始めた人々のお世話と、その作物の販売を中心に活動していましたが、現在は学校や孤児院（児童施設）等、子どもたちが集まる施設を対象に普及活動を行っています。

母親と子どもたちの食糧環境向上を主な活動とする、アソシエーション「ソアキロンガ (SOAKILONGA)」は、2022 年より自然農法に取り組み、圃場の管理はその職員が行っています。代表のジョゼット・ラコトエリさんは、普段は栄養学を専門とする内科医として働き、「アグリナチュール」の代表であるヤンナさん家族のかかり付け医であります。その縁で、秀明自然農法と出会いました。

この施設では、その地域に住む十分な食事（栄養）が取れない約 50 名の子どもたちをお世話し、自然農法の野菜

を使った給食を提供しています。

ジョゼットさんは、「私たちは Shumei と出会えて幸運です」と話しています。

「喜びの村 (Village de la Joie)」

地域に学校がなく教育を受けることができない子どもたちのために学校を作り、給食も提供している「喜びの村」では、2022 年より秀明自然農法が実施されています。この施設には、幼稚園から中学生までの約 300 名の子どもが在籍しており、さらに約 30 名の孤児もお世話しています。シャールさん、シモンさんのフランス人夫妻が 2003 年にこの施設を創設し、その 3 年後から順次学校を開校致しました。施設内の土地にて、その職員や、地域の農民が自然農法を実践しています。収穫物は子どもたちの給食に使用され、子どもたちも作業に参加しています。シャールさんは以前有機農法でコーヒー栽培をしていましたが、昨年、自然農法と有機農法の両方で、新たに作付けしましたが、自然農法の方が、良く育っている様子を見て、その素晴らしさを確信されました。シャールさんご夫妻は、「自然農法の普及をサポートしたい」と話しています。



ソアキロンガの子どもたち



自然農法の野菜を使った給食



ソアキロンガの圃場スタッフ



更谷浩幸（右端）ソアキロンガの施設にて



喜びの村の子どもたち



自然農法の野菜を使った給食



喜びの村 シャールさんご夫妻



喜びの村の畑



喜びの村のスタッフ

最後に、首都アンタナナリボ近郊にあるカトリックが運営する孤児院「慈しみのセンター (Centre de compassion)」にて、昨年4月より自然農法の実践が始まり、7名のシスターと13名の研修生が圃場を管理し、子どもたちも作業に参加しています。この施設でも収穫物が子どもたちの給食に使用されています。これまで牛糞を使用した有機農法を実践していましたが、自然農法の作物の味や風味は違うと話しています。

アソシエーション「アグリナチュール」の代表 ヤンナさんからのメッセージ

「これまで10年にわたり Shumei からの支援に心から感謝します。11年目となる現在、学校や孤児院といった子どもたちがいる環境にて、自然農法活動が発展していることをうれしく思います。各施設とも自然農法の作物にとっても満足しています。

マダガスカルのような開発途上国において、自然農法が重要な役割を果たしていくと思います。

マダガスカルのように多くの人々が自然農法のフィロソフィーから恩恵を受けられるよう、Shumei とのこの貴重なコラボレーションが、今後も継続されることを願います」



慈しみのセンター 自然農法の給食



慈しみのセンター看板



慈しみのセンター



慈しみのセンターのシスターたち



ヤンナさん

以上のように、教育施設において自然農法が実践され、自家採種にも取り組んでいます。その作物は子どもたちの給食の食材として使用され、子どもたちの圃場での作業参加も見られます。今後、各施設での活動が更に充実していくこと、また新たな施設へと自然農法が普及されることを願います。



